

『教育佐賀』一九五八年九月（佐賀県教育委員会）

教育計画の立案と調査

国立教育研究所 矢口 新

極めて一般的な言い方をすれば、凡そ何か
を
実行しようとするときに計画がない筈は
ないのである。計画というのは紙に書かれた
ものということではない、紙に書かれようと
書かれまいと計画がない所に実践はない。実
践が計画的でないなどという言い方
がされるが、その場合でも計画が全然ないわ
けではない。あることはあるのだがそれがず
さんであるということである。また行き当り
ばったりで計画がないという言い方
がされることもある。それはいくつかのこと
が順序段階をふんで系統的に行われる必要
がある場合に各段階の間は何の連関もなし
に行われるということであろう。それはいく
つかの段階的仕事を全体としてみた時、その
系列が問題にされているのであるが、その場
合でもそれぞれの段階だけをみれば、それぞ
れには何等かの意味で計画があるのである。
だから計画と一口に言うけれども、その内容

にはいろいろあるのである。県の教育計画な
どという時には、どういう内容のことが問題
にされているのであろうか。例えば県立の高
等学校を一つたてるというのも県の仕事で
あつて、そういう時、計画がなければ学校は
建てられない。そういうのは併し普通は県の
教育計画とは言わないようである。県の教育
計画という時は大体においてもつと巾の広
いものを言うのが普通である。
例えば、富山県の総合教育計画というのを
みると、これは二十七年から昭和三十二年に
亘る九カ年の計画という長期に亘るもので
ある。まず時間の中が大きいことが特色であ
る。またこの中は、幼児教育、初等教育、中
等教育、特殊教育、社会教育、教育行政等の
諸分野についての計画に分れているが、つま
り県の教育の全面をカバーしているという
意味で巾が広い。更にそれぞれの分野につい
ては、九カ年に亘って行われる所の教育機関

の配置の適正化、充実化の計画、施設設備の
拡充整備計画といったいわゆる目に見える
施設計画から、教育内容方法の整備充実計画
教員の整備計画など目に見えない非施設計
画まで含んでいる。これは総合計画というこ
とになっているから、あらゆる分野に亘って
の計画が含まれているが、これらの中の一部
をとつてもかなり大きな計画である。例えば
教育機関の適正配置、充実の計画といつても
幼児教育については、幼児教育の普及の問題
を解決するべき問題であり、初等中等教育に
ついて言えば、或は現在問題になっているす
しづめ教室の解消の問題であり、或は学校統
合の問題である。余談であるが富山県では、
昭和二十七年から、そういうことを問題にし
ているのであつて、一時の流行ですしづめ教
室解消を計画したりしているのではないとい
えよう。
それはともかく、こういうように考えてき
てみると、県が計画的に実施して行かなけれ
ばならない教育の問題は現在山積している
ということがわかると思う。教育計画とは何
かなどということを言葉の上で問題にする
のでなく、現在の教育をながめて、如何なる
問題があるかをとらえてみると、その解決に
は五年、十年に亘って計画的に人間の努力や
物資を投入して行かなければならぬことが

多い。そういうことは国家の立場に立っても県の立場に立っても、或は一つの学校の場合でもある。そこに教育計画などということが考えられてくるのである。

2

教育計画という言葉はいろいろに使われている。県の教育計画という使い方をすると学校の社会科の教育計画などという使い方をするとでは、随分異った使い方である。後者の場合は、いわゆる教育課程の計画であっていわゆるプランを意味することが多い。県の社会科の教育計画などという時もそういう使い方であろう。しかし県の産業教育計画などという時は、そういう使い方とはちがってもつと中の広い内容をもっている。実際に現場でどういう学習をするかということより、その学習が行われる条件の整備計画の方が主として考えられている。学校の施設設備をどういうように充実するか、教員をどれだけ確保するかさういった事が中心になっっているといつてよい。どちらも教育計画という言葉を使っても悪くはないけれども、この二種がねらっている所は非常にちがうのである。

プラン的なものは教育計画といつても全体的な性格がどちらかといえれば目標的なもの

のである。こういうように学習させる積りであるといったものである。だから実際やるとその積り通りにならない場合が多い。相手が児童生徒という人間だからという理由もある。けれどもそればかりでなく、基本的性格が、実現の手段を考えていない場合が多い。例えばこれこれのことをわからせる、そのために学習活動として話し合いをするなどと書いてある。併し実際に話し合ってみると、期待通りにわからせることが出来ないことが多い。わからせようと思つたら、もつといろいろな準備をして、教材を揃えてからでなければ出来ないのだということが、やってみて初めてわかるのである。つまり理想を実現する手段についての考え方が甘かつたのである。

例えば、社会科の学習活動がある理想の段階に到達するためにはどういふ条件があるであろうか。教師がその内容について十分な識見をもつていなくてはならぬ。子供が予め経験している社会の事実としてこれこれのことがなくてはならぬ、といったことなどは非常に大きな前提条件であるが、いわゆるプランではそういうことは考えられていないのが普通である。プランはそれをみた教師がそういう準備をすることを前提としてつくられているが、実際には多くの先生はそれは

しないで、ただプラン通りやればよいと思つて、学習させようとするについて大して知識を持たず、教材も準備しないで指導をする。そうして結局プランは使い物にならないということになる。

若しそういう現実がある所で、理想的な社会科の学習を実現させるための計画を立てるとしたら、まず教師の準備をどうするかといったことが第一の仕事となる。プランつくりより前に教師の勉強の計画をたてる事がよいことになる。単元の一つ一つについて、その内容となつていているものはこういうことだということを科学的に勉強してもらつた計画をたてる方がさきである。つまり社会科の学習が理想的に行われるために前提となる条件を整備することである。

教育計画について必要な考え方は、この前提条件を如何にして整えて行くかという考え方に徹することである。そうでないと観念的なプランが出来てしまうのである。例えば県の産業教育計画をたてるとする。その究極は、学習の場がこれこれこういう形で行われることだということになる。しかしそれだけならばいくら詳しく描き出してみてもそういう前提条件が必要なのかを具体的に詳しく考えなくてはならぬ。そしてそれを実現

する手段を考えなくては折角理想とする学習を考えてもそれが具体的に実現しない。

教育計画ということが必要とされるに至った理由はまさに右のような所にある。教育計画ではないけれども、ソヴィエットや中共などの五カ年計画とか十カ年計画などというのほみなそういう意図のものである。それは単に理想像を描くだけでなく、その理想像に到達する順序、段階を明らかにするのである。そして理想像に到達するために必要な前提条件を出来るだけ広く、総合的に整えて行くこうとするのである。これが今われわれに必要とされている教育計画というものの性格であろう。

だから以上をまとめると、教育計画というものは次の如きものとなるであろう。第一に具体的な理想像がなくてはならない。具体的理想像がないでは、そもそも計画というものはじまらない。これが分析されて、多くの条件が明らかにされ、それと現実との落差が考えられて、実現の手段が考えられ、そこから計画が成り立つのである。

第二に、それは理想像へ到達する段階が明らかにになっていなくてはならぬ。先にも述べた如く、ただ理想像が描かれているだけでは空中楼阁の如きものである。計画というのは現実化への計画なのである。従ってそこから

時間的な計画となってくる。

第三に、従って計画というのは、基本的に総合的なものである。或は様々な要素の構造統一をはかるものといつてもよいかも知れない。つまり現実というものはそういうものであるが、例えば、産業教育計画を例にとれば、それは最終的には学習がかく行われるということになるかも知れないが、そのためには施設設備の問題も関係すれば、教員の問題も関係すれば、教材の問題も関係し、それらが総合されて、一つの県の産業教育がかく行われているという姿が実現するわけである。

要するに教育計画というものは、極めて現実的性格のものであるが、それが理想像への道として現実性をもっているということである。煎じつめれば極めて当然のことであるが、これがしばしば忘れられて、理想のない機械的、形式的計画になったり、現実性のない観念論、机上プランになるのである。

3

調査すれば教育計画が成り立つというように考えたら誤りである。よく質問をうけるのであるが、教育計画を立てるのだが、どういう調査をしたらいいだろうかなどという。それに対してあなたはどのような理想像を描

いているのか、そこから調査することもきまってくるのだという答えをする。そうすると理想像がきまっておれば調査をする必要はありませんなどという反論が出る。これは一応もつともようだが、根本的な誤謬がある。第一に調査というものは、ある意図があつて行うことが出来るのであつて、機械的に行えば出来るというものでない。調査というのは現実をみる或る方式をいうのであるが、それは一定の方式によって結局は現実がどうなっているかを明らかにしようとするのである。しかしただ現実がどうなっているかではなくて、或る具体的な事柄についてどうなっているか、ああなっているかを見ようとする所に調査がはじまる。

具体的に例をあげると、産業教育の現実はどうなっているかでは調査のしようがない。具体的な事柄で中学校で工業技術を訓練することが行われているか、行われていないかということになれば調査がはじまるのである。これは産業教育ということをまず定義しなくてはならぬなどということ言っているのではない。そうではなくて、その内容が具体的に考えられているかということである。そしてそれについて、こうなっているか、ああなっているかとか、こうなっているかいないのかとか調べるのである。この場合、

中学校で工業技術を訓練することというのはどういふことが具体的に考えられていると、或る調査が成り立つが、その時はその時において現実をみているのである。しかしそれをみている中に、自分の理想像が発展し、それによってまた一步突込んで現実をみなくなる。そうして現実が無限に深くみられる。はじめ見ていた現実と次第に深くみえてきた現実とはまるでその姿がかわっている。こうして、同じ一人の人間であっても、見ることによって、現実のとらえ方がまるでかわってくるのである。そればかりでなく様々な人の考えを比べてみると、現実のとらえ方が異なっているのは、そこに現実への迫り方が浅いか深いかがいがあるからである。

つまり漠然とした理想像があつて、現実をみてそれによって理想像の方も次第に己れの姿をはつきりさせてくるし、それによって現実も亦整理されてくる。そこに現実をみる一つの方式である調査も役割を果すのである。こうして理想像は無限に発展し、現実もそれによって無限に整理される。いわば螺旋状をなして、展開して行く、現実は無限に深く掘りさげられて行く。そこに調査は無限に成り立つ。

だから調査は一回やったら現実がわかつて、それで計画が成り立つなどというものでない。調査もまた無限に発展する。或る段階で、或る調査が成り立つが、その時はその時において現実をみているのである。しかしそれをみている中に、自分の理想像が発展し、それによってまた一步突込んで現実をみなくなる。そうして現実が無限に深くみられる。はじめ見ていた現実と次第に深くみえてきた現実とはまるでその姿がかわっている。こうして、同じ一人の人間であっても、見ることによって、現実のとらえ方がまるでかわってくるのである。そればかりでなく様々な人の考えを比べてみると、現実のとらえ方が異なっているのは、そこに現実への迫り方が浅いか深いかがいがあるからである。

調査をして教育計画を立案するというのは、こういう理想像と現実認識との無限の発展を或る時において固定させた所に成り立つといえよう。そしてその或る時において考えられた現実から理想への到達の段階を整理したものである。だから計画もまた次第に発展する。つまり修正がなされるといふこと

になることは到達点が明らかになることであり、ギャップが明らかになることは計画の内容が明らかになるといふことである。

そういうことは、具体的に述べないとよくわからないから次に富山県の総合教育計画を例としてあげてみよう。この計画では、右の計画の目標を明らかにする所までを叙述した部分を現状分析というように考えている。その幼児教育の所をみると、教育機関の配置、教育内容、方法、施設、設備、教員というように大きい項目にわかれて調査が行われている。初等教育の所をみると、教育内容方法の所が社会科、理科、視聴覚教材教具、特別教育活動というように細かく調査されている。その他には施設、設備として社会科、理科、その他実習飼育設備が調査されている。中学校に関しては、設置の状況、就学の状況、就職及進学の状況、教育内容方法に関して教育課程の構成、職業家庭科、学習の方法、施設、設備に関して農業に関するもの、工業に関するもの、商業に関するもの、その他、などが調査されている。

それらを比べてみるとわかるように、それぞれ調査されていることがちがっている。それぞれの段階の教育がもっている問題がちがうからそうなのである。幼児教育で調査された教育内容の調査と、初等教育でなされたものとは密度や範囲が異っている。それはやはり現実に幼児教育は今普及の段階にあり、小学校教育はそういう段階を通り越して充実整備の段階にあるからである。このように調査というものは、やはり現実がどうであるか、また調査し計画する側がそれをどう考えているかということからきまってくるのである。つまり、具体的問題によって、それぞれ調査項目が構想されるのであってどこにも共通な調査すべきことなどというのではない。言葉であらわせば共に同じく教育内容、方法の調査ということになるかも知れないが、その中味は異なるのである。また全く同じようなことが調査されても、その調査されたことが全体として問題にしていることの中で如何なる所に位置づけられるかというところが異なるのである。

即ち調査というのも一つの論理的構造をもったもので、その中にいくつかの要素的な調査事項がある。それらが一つの考え方によって統一され構造づけられているのである。そういう調査でなければ、そこから結論が出てくるということがない。機械的にいくつかの調査票によって調査をすれば結論が出るなどというものでない。そこには一つの論理、構想がなくてはならないのである。それを導くものは先に述べた理想像なのである。しかしその理想像も現実に対する調査を行うことによつて、次第により明確に具体化する。調査はそういう役目を果すのである。

それと同時に調査は、理想像と現実とのギャップがどこにどういう形であるかということをも明らかにするのである。いわば計画の実践によつてうずめるものが如何なる形でどう存在しているかを明らかにするのである。

5

そこまで明らかになったら、次は実現の順序段階を考えることである。これもまた現実が規定するのである。そこにもまた調査が必要である。実現の順序段階を考えるところもただむやみに考えてもだめである。社会がどれだけのエネルギーをもっているかを計算しなくてはならぬ。といつてもエネルギーは固定したものでない。計画をたて、実現して行こうという意図があり、人々がそういう努力をすればエネルギーは結集される。それがなければ分散してしまう。計画的実践というのはその意味では分散しているエネルギーを結集することなのである。

所でどうしてそのエネルギーを調査するかというと、まずその問題にしていることに関して時間的（歴史的）発展をみることであ

る。それは今企図している計画的実践によつてではないが、自然の間に社会が発揮したエネルギーをとらえることが出来る。それが一つの参考となるのである。計画がなく従来通り放置すれば、やはりその程度にエネルギーは発揮されるとみることが出来る。それが計画の出発点である。

これを出発点として、エネルギーを様々の要素に分析してみるのである。いわゆる経済という点から見ること出来る。人々の努力という点も、人々の考え方というものも、それぞれエネルギーの要素である。これらのものが出来るだけ明らかにされれば、それらを如何にして総合し、全体的なエネルギーとして結集するかを考察するのである。ここには極めて広い範囲の調査研究が必要である。

現代はエネルギーを経済力として見る考え方が強い。それは確かにそうであるが、それのみであるなら、財政に限度がある所にくら総合的計画を立てても意味をなさないという結果になる。計画を考える立場は、経済力に転換し得る人間的エネルギーを問題にしなければならぬ。人間の物の考え方がかわれば消費的な教育にも経済力を注いで、より大きなエネルギーを獲得しようとすることも出来るのである。そういう人間の考え方が社会的にならなければ、教育計画に本腰

を入れるようにはならないのである。

更にもう一つ教育計画によつて教育を発展せしめようという考え方は、教育が現在消費している社会のエネルギーの構造的転換をはかるといふ考え方、従つて従来のもをそのままにして新しいエネルギーをそれに付加しようということではなく、全エネルギーの再配分を計画することなのである。これもまたむづかしいことである。人間はとかくこれまでの惰性の中で生活して、なかなか転換出来ない。例えば一度とつた予算はこれを返上することは絶対にしないと同様である。教育計画はそこまでメスを入れて、エネルギーの再配分を考えることでなくてはならぬ。ここにもまた大きな問題がある。人間がそういう考え方にならなければ出来ないことである。

かくして、最後には、教育計画をどれだけの人が理解し、実施しようという意図をもつかということが中心の問題となる。全県の人々がそう考えれば、実施しうる計画になるのである。人々がそういう考えになるというのは、ただ説明されてそうなるのではなく、自ら理想像をたて、調査をし、計画目標を明らかにし、その実現の順序段階を明らかにするといふプロセスを通して理解するのである。調査し計画して行く組織がどうあるべきか

ということに対する基本的な考え方は以上のように答えられるべきであろう。

教育計画というのは紙の上にプランを書きつらねることではなく、もちろん調査票をあつめることもなく、実は社会の人々や教育者が自らの教育の姿を反省し、批判し、理想をたて直すことなのであつて、人間の側の問題である。せめて教育委員会とその事務局が、こういう理想と現実との構造的認識をもつことが出来たら、そこから教育の実践の仕方は自然とかわるのであろう。かくて教育計画をつくることは、紙の上に書くことでなく、その仕事にたずさわる人間をつくり直して、新たな教育構造を考え実践する人間をつくることとが中心となるのである。

教育計画をつくることそれ自体が教育的な仕事なのである。教育計画を立案することを通じて、それにたずさわった人々が教育され、それらの人々が教育の計画的な実践や運営を考えるようになることが最も大切なことである。そうなつてはじめて、机上プランでなく、紙の上の文字でなく、教育発展の原動力となるのである。